
例え何度も記憶喪失になっても・・・。

空

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

例え何度も記憶喪失になつても・・・。

【Zコード】

Z0438BA

【作者名】

空

【あらすじ】

夢茄の高校にある転校生が来た。その転校生は夢茄の元カレの龍。しかし龍は記憶喪失。そんな中で夢茄と龍の恋の行方わ・・・。

ガタン ゴトン。

私はいつものように駅のホームに向かう。
電車に乗るといつものように、東高校の人ばかり。
でも、そのなかに一際目立っているひとがいた。
あの制服は確かに西高校だから真逆のはず！
顔は見えなかつたけれど周りの女子はかつこいとさわいでいた。

私の名前は
さわだゆめな

『澤田夢茄』

ちょー暇人
可愛い

頭はまあまあかな。
部活はしていない。

暇だなあ。

そう思いながら
携帯をいじる。

? 東岡町 東岡町 で下りる方
あつ下りなくちゃ。

私は急いで電車を下りる。
? プシュー。

私の高校は駅から歩いて5分くらいでつべといつある。
転校生

いつものように靴箱に向かう。

「おはよう」

「おう！おはー」

そうお互いに挨拶を掛け合う2人、

彼の名前は
さわいけいご

『澤井慶悟』

かつこいい

バカ

とにかくモテる

部活はしていない

私の友達の一人

2人は一緒に教室に向かう。教室に着くと私の友達がいた。

一人は幼稚園からの幼なじみ。

だいとうももは

『大藤桃葉』

優しい

頭いい

部活はしない

でも水泳や空手やと完璧

もう一人は

あらたゆうや

『荒田祐也』

面白い

優しい

かつこいい

部活はしていない

慶悟 祐也 桃葉 夢茄

は一年から同じクラスの仲良し4人組。

教室は今日転校生がわたしらの学年に来ると言ひ話題ばかり。

男子は可愛い女子がいいと言つ。女子はかっこいい男子がいいと言つていて。

そんな都合よくいくかい！と思つていた。しかし見事にうちらのクラス。

転校生はイケメン 爽やかつて感じ。

転校生の席はまさかの・・・。

転校生の名前は。

いせきりゅう

『井関龍』

あー暇だなあとあぐびをしながら田を覚ました。もう休み時間だった。

私の後席の桃葉が

『夢茄あおはよう』夢茄の隣、転校生だよ

『えつめんどいなあー』

そこに慶悟が来た。

『夢ドンマイ！

この俺が認めるイケメン君だよ』『えつ！イケメン』

あんなにめんどうさがつていた夢茄がやる氣を出した。

?キンコーン・カンコーン転校生の周りから人が離れて自分のせきにつく。転校生が自分の席につく。夢茄は、話しかけようとする。でもよく考えたら転校生の名前知らないやつ？

そう思い桃葉に話しかける。

「ねえ！桃葉この子の名前って何？」桃葉は

「えつ！あんた元カレの名前も顔も忘れたの？」

「どういうこと？その言い方だとこの転校生は私の元力剣なの？」

「うん！まあ！話しかけたらわかるよ」

私は桃葉に、そういわれ話をやめた。

私は誰？と思いつながら恐る恐る転校生に話しかけた。
「ねえこれから宜しくね？」

転校生が振り向いた。「えつ！龍！」

思つたことを口にしてしまった。

「その言い方は前から知つてたつて感じだな」

「えつ！当たり前でしょ？だつてわたし龍の元力剣なの！」

「ふーん。俺は覚えてないけど？お前の名前わ？」

「まじで覚えてないの？」「おう！」

「私の名前は澤田夢茄！改めてよろしく」

「おう！俺は井関龍」

えつ名字が違う……。

前は確か……。

河崎だつたはず。

でも本人に聞くのはなんていうんだろう。

なんか失礼つて言うの？

なんだつたけ。

まあいいや！

真実

今日はギリギリの登校だった。

チャイムがなり、先生が教室に入ってきた。皆急いで席につく。

私の横の席の龍が来ていなかつた。

先生が言うには今日は休みらしい。

つてことは私部活してないし、横の席の人気がその日のプリントを持っていかないといけない。

放課後になつた！

桃葉と私と慶悟と祐也

で、龍ん家に向かう。

「やつとついた」

「てか、こんなに遠いの？」

「ピンポーン

とインターホンを鳴らす

？ガチャ

ドアが開く。中から龍のお母さんが出てきた。

「あら。龍の友達？」

「あつえつとプリントを持って来ました」

私は緊張しながら答えた。「上がつて…上がつて…」「あつはあい

迷つてたわたしを見て桃葉が答える。

私たち四人は上がりせもらつた。

台所の椅子に座る。

龍のお母さんがジュースを出してくれた。それを飲みながらおばさんが話してくれた。「夢茄ちゃん。久しぶりだね。龍が転校してきたときはびっくりしたでしょ？」「はい！」

「夢茄ちゃんと別れた、数日後に私と龍と夫とで、ドライブに出掛けたの！そこで事故にあって夫は亡くなり、龍は・・・記憶喪失になつてしまつたの。

夢茄ちゃんととの出来事だつて、今までの友達とのことも忘れてしまつたの。

それに事故にあつて、引っ越ししてくるまえまで学校にも行かなかつたの。

でも、最近の龍は楽しそうなの。夢茄ちゃん改めて接していくのは無理かも知れないんだけど、あの子を宜しくね！別に良い思い出出なくともいいの。何かと思い出さしてあげて。」

「あの・・・思い出さないほうがいいんじゃないんですか？」

「確かにそうかも知れないと医者には記憶を戻していくのが良いって」「・・・わかりました。役に立つかはわからないけど頑張つて見ます」

過去の思い出

私と龍が出会ったのは中学2年生の時だつた。
初めて同じクラスになつた。

私は凄くかつて良い龍に引かれていた。龍も私に引かれていたいたらしい。

龍に告白されて、私の返事はもちろんOK。

そして付き合うことになつた。遊園地や龍の家にも行つたなあー！
プリクラも撮つたなあ！

「そうだ！プリクラや写真持つてこいつつとー」

「そしたら思い出してくれるかも」

そして学校へ持つて行つた。

龍に見せた、しかし龍の反応は薄く、表情を変えない。あれえ？も
しかして記憶が戻つてた？そう思い聞いてみた。

「ねえ龍？あんた！記憶戻つてるでしょ？」

「はあ？記憶つて何の話？意味わからんねえ！」

「だから……」

私が言おうとすると同時に、龍が喋り出す。

「お前が知りたがつてること全部教えてやるから放課後残つてろ」「どこに？」

「教室」

「わかった」

私は桃葉 慶悟 祐也 に帰れないと伝えた。
ついに放課後。

部活の服を着て部活に向かう人、友達と急いで教室を出る人。桃葉
たちにもバイバイと伝え、ついに私と龍だけになつた。
教室はシーンと静まりかえつている。

「お前の言った通り記憶は戻つてるよ」と龍が話した。

わたしあはやつぱりという顔をしてたら、龍はいつからか話しだした。

「ここに転校してきてわかつた。ここに転校してくるまえに今までのアルバム見ててお前と写ったやつがあつて最初は誰とかわからんかったんだけどお前が元カノとかいつたやんだけん記憶がさ戻つた」

「そうだつたんだ」

「なあ・・・俺がお前と付き合つてた頃に行つたデート場所とか教えてくんない」

「記憶戻つたんじゃないの？」

「そりなんだけど、お前との記憶だけ思い出せないんだ！その記憶のなかに一番大切なことを忘れてる気がするんだ」

「わかつた」

そして私たちと一緒に教室を出た。

最初は出会つた場所・別れた場所と次々に説明しついく。

デート場所は、次の日の放課後にした。私たちが出会つて、別れた公園についた。

忘れた記憶

私たちが出会つたのはこの公園にあるブランコ。

私は大好きだつた人に振られてブランコに座つて泣こうと思つていた。そこは私の何て言うか・・・落ち着く場所！

でもそこにはある男の子がいた。その男の子も重い空氣でブランコの前の柵に座つていた。

私は今日はやめようと思つて家に帰つた。家に帰つても気持ちは晴れなかつた。だからあの公園に行つた。またあの男の子がいた。私はその男の子の子のところへ向かう。その男の子こそが龍であつた。龍はおさ馴染みだつた子と遠距離恋愛になり彼女に彼氏ができたらしくて龍たちは別れた。だから落ち込んでいた。

2人はブランコに座り、同時にため息をついた。それが面白くて久しぶりに笑つた。

そして龍から「付き合つか？」って言われて私たちは悲しい壁を乗り越えていった。でもある時に、龍から「別れよう」って言われた。

その理由は教えてくれなかつた。

未来

私たちはあのときと同じようごプランに座る。

「龍、ここが私たちが出会つた場所」

「そして、別れた場所だよ」

「ここが？」

「うん！」「なんか思い出した？」「全然」

「次わざデート場所に行こう」

「ねえデート場所とかに行つてなんかほんとに思ひ出すの？」

「わかんない」

「じゃあ。もうやめよう」龍は何も言わなかつた。

「そうだ！たしかあの時だつてこんな風に喧嘩して別れたんだつた。で別れようつて言われたんだつた。あの時別れてからここには来なかつた。でもすぐ後悔したんだ。それに、前みたいに戻りたい。そう思つた。いつの間にか私はもう一回龍が好きになつていった。この気持ちを龍に伝えたらどうなるかなあ？！」

そう思いさつきた言葉を思い出した。

たしか私はもうやめようつて言つた。少しでもいまつながつていて。それにはきずいた私は龍に・・・。

「龍さつきはやめようつて言つてごめん。昔ねえ龍と別れる前私たち喧嘩してたんだ。それで別れて、すぐ後悔したの。次いくデータ場所は本当にデートしよう！つまり私たちもういいかい・・・」私が戸惑つていると龍が喋り出した。

「夢茄！好きだからこんな俺と付き合つてくんないかなあ」「えつ

！龍？えつ？龍も？」龍も同じこと考えてたんだ。

「私も龍が好きだよ。私と付き合つて下さい」

「まじでえ！」

「うん」

「その日はもう帰つた。

（次の日）

今日は初デートした場所に行く待ち合わせはあの公園。

待ち合わせの時間まであと30分。早く来すぎちゃった。それから20分くらいいたって龍がきた。「あつ 龍!」

制服とはまた違うからつい見とれちゃう。

そして初デート場所遊園地に向かう。ジヒシト「ースター、お化け屋敷とあつと言つ間に今日は終わつた。

次いつ遊ぶかと私は浮かれていた。それを龍にメールする。しかし返信は返つて来なかつた。私は龍に電話してみた。すると聞き覚えのある声がした。

「やあ～。久しぶりだね。もう待ちくたびれたよ。夢」

「慶悟? どうして慶悟が龍の携帯に出来るの?」

「俺の名前は竜崎慶悟だつたつて言つたら正しいかな」

「竜崎慶悟? 竜崎慶悟? あの昔はおデブの性格悪の?」

「うん」「なんで? なんで龍の携帯に慶悟が出るの?」

「こいつ龍は俺のかあさんを奪つた」「えつ? どうこいつ?」「俺の母さんは龍の母さんと俺の父さんが不倫してたそれを知つていた母さんがストレスのたまりすぎで病気気になつて死んだ。それをいじいじとに龍の母さんと結婚したまあ龍は悪くはないけどなんとな

く

「なんとなくつて龍にやめてよ」

そして電話は切れた。

また電話がかかってきた。それは龍のお母さん。

(はいもしもし)

【夢茄ちゃん? 龍が倒れていま病院にいるの来てくれないかな?】

(はいわかりました)

そして私は準備して急いで部屋を出た。

そして龍のいる病室についた。

? ロンロン

どうぞとながらお母さんの声がした。私は中に入った。龍は田を覚ましてりんごらしきものを食べていた。龍はおうーっとにかく

目を向ける。そして龍は龍のお母さんに「母さん夢茄と2人にして
くんないかな」

「わかつたわ」「

「じゃあ夢茄ちゃん何かあつたらナースコール鳴らしてね

「はい」

それだけ言つとお母さんは病室を出て行つた。

「夢茄俺全部思い出した」「えつ?...」

「俺とお前が別れた理由はあの慶悟に別れなくちや夢茄に何かする
つて言られてたんだ」

また龍とデートする約束をした。今までとは違う2人がいまここに
いる。新たな明日に向かつて歩みだしている。何年後だつて私たちは
一緒にいる。例えまたどつちかが記憶喪失になつても・・・。 デ
ート当日

私は浮かれお母さんに行って来まーすと玄関から叫び玄関のドアを開けた。そこには遅一せつて顔してる龍がいた。「龍?! 何時から
いたの?」

「さつき来た」

そして龍のバイクに乗り、デート場所に向かう。
今日は海辺に行き、買っておいた花火をする。
海辺に着いた。

私はバイクを降りて海に向かう。靴を脱いで海に足を入れる。気持ちいい。

龍の方をみるとじつちを見ながら笑つている。

「何?」

「いやあ懐かしいなあと思つて...」

「えつ?」

「前もここに来たじやん! そんときはさあワンピースきてサンダル
なのに走り間わつて転けて大変だつたじやん! 覚えてないの?」と
龍は笑いながらいった。

夜になり花火をしながら私は伝えたくなつた言葉を口にした。

「龍。大好きだよ。例え例えまた記憶喪失になつても思い出をしき
あげるから。」

「夢茄？俺だつて夢茄が大好きだよ。夢茄俺と付き合つてくれてあ
りがとう。夢茄キスしていい？」

「えつ？ちょっと待つて」「嫌？」

「嫌じやないけど」「じゃあいいじゃんか」

「えつ？」

龍は私に顔を近づけて來た。

そしてゆつくりと龍と私の唇が触れた。私はそつと目を閉じた。

大好きだよ龍。

何年たつても。

約束するよ。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0438ba/>

例え何度記憶喪失になっても・・・。

2011年12月31日22時45分発行